

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 村上春樹『アンダーグラウンド』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。)



第 124 回のツイキャス読書会の課題図書は、村上春樹の『アンダーグラウンド』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

「アンダーグラウンド」少し読んだ感想

地下鉄でサリンの被害に遭われた方が、その日起こった事について語られていました。

私は、ただ書かれている事を読んでいだけで、本は分厚いけれど全部読めるとしていました。

でも、読んでいるうちに少し心が重くなってきて最初の所までしか読めませんでした。

まだ最初のところですが、読んでいて辛かったところは、明石達夫さん(仮名)の妹、志津子さん(仮名)がサリンの被害に遭われて、それだけでも可哀相なのですが、

(引用 はじめ)

そのとき母は思わず「志津子はいっそのまま死んでくれればよかったのに」と口にしました。(P.211)

(引用 おわり)

母親が娘に対してそんな事を言わなければいけない状況とは、どんなに辛かっただろと思うと、涙が止まりませんでした。

偶然、地下鉄に乗り合わせただけで、ささやかな幸せが奪われてしまった。

どんな人にもそれぞれの生活があって、それはかけがえのないモノだという事が想像できれば、他人の命を粗末にする事なんてないのだと思う。

でも、今は人に優しくできない程、辛い世の中なのかな？ とも思いました。

まず、自分の幸せを感じられなければ、他の人の事も考えるなんて出来ないのかもしれないなと思いました。

(おわり)

『アンダーグラウンド』 感想文

私は、村上春樹はアッセンブリ作家だと思っている。求道者的作家、例えばトルストイとは隔絶した差を感じる。

執筆の動機が寄せ集めの陳腐なものに思え、この作品が人気作家の余技に思えた。

彼はマスコミが、カルト教団と被害者の二項対立の図式として報道していると非難しながら、結局、彼も被害者側と教団側の各巻を出版しただけだ。

病院篇、消防篇、警察篇、教育篇なども編纂されるべきだと思った。

インタビューに応じた人達は、1/60の人格になったような感じを受けた。鮮烈な地獄図の一片にされてしまった。被害者の恐怖の記憶を掌中にし、利用した、追体験型、興味本位の小説に思えた。

私は読みながら、この作品の枠組みを崩す必要性を感じた。私が考えた最優先事項は、その時、どのようにして自分の命を守るか、だった。そういう訳で、私はこの本の枠組みを、死者、重症者、軽症者別というように頭の中で並び替えた。死者、重症者のとった行動が重要に思えた。

事態への対処方法は、大別すると「事態をコントロールする」か、「逃げる」か、のどちらか、だそうです。

私は一刻も早く避難する方を選んだ。動けない重傷者が居たら、その場に留まらず、周りの人と協力して、一目散に運び出すだけだ。

マスコミの問題や、その他はずっと後の問題に思えた。やはり、村上春樹が安全地帯から展望して、この惨劇を商品化しているように思えた。

二次攻撃が無かったのが幸いに思えた。ごった返す病院が二次攻撃を受けたら、と思うとゾッとする。

毒物による長期的影響、とくに子孫への影響や体細胞への影響についても不安を感じた。

マスメディアのメディア・スクラム／パパラッチのような様相／メディア・パニシュメント／マスメディアと関係先との持たれ合いからくる編集、などにも問題を感じた。

メディア・リテラシーも必要だと思った。

犯人達が外国勢力ではなく、我々の子弟であったことに問題を感じた。

(おわり)

『他人の苦痛へのまなざし』

地下鉄サリン事件について、日本のことをよく知らなかった昔からその名前だけは知っていた。でも「サリン」という発音が韓国語の「殺人」と同じなので、自分の中では「地下鉄殺人事件」という風に整理され、いわゆる「ありそうな」として認識されていた。

のちにそれがサリンという毒ガスが散布されたと聞いてから驚いたが、「殺人」から「毒ガス」に変わっただけで驚いてしまった自分にまた驚かすにはならなかった。

この作品を読んで何よりも先に思い浮かんだのは、2014年、大型旅客船の「世越号」が沈没し、多くの死傷者を出した事故だった。もっとも、その原因や様子は違えど、「生き残った」人々が抱え込んでいることは同じな気がした。

あの頃から何年も経っているのに、何を今までぐずぐず引きずっているのか。根性がないぞ。遺族が政府の補助金をかっぱらおうとしている。もううんざりだ、もう聞きたくもない。大した怪我もしていないのに、被害者ヅラをしやがる。あの事件はもう解決済みだ。未来を向いて行こう。

寝たきりになったイワン・イリイチに向けた周りの視線のように、人々(我々)は他人の苦しみにあまりにも鈍感すぎる。スーザン・ソントグは、我々は他人の苦痛に「窃視症」のような目さえ向けるとも言った。他人の苦しむ姿を見ながら、自分の安穩を確かめるといふ不謹慎さ。「○○に生まれて良かった」と言い出す人は、とても許せない。

しかし、他人の苦しみが我々に分かる筈もないし、分かった気になってもならない。我々ができることは、恋愛相談の女性の話をじっと聞いてあげるくらいの、その当事者の話に耳を傾けることくらいだろう。

感情的になりがちな事件ではあるが、それだけ「怒り」や「悲しみ」に負けてはならないと思う。感情に沈み混んでしまえば、へんな人たちと見なして罵声をあげるだけでは、何も始まらない。自分にオウムに陥るような面はないか、もし自分がその場にいたらサリンがついている新聞紙を片付けることができたのだろうかなどを考える必要がある。

明るい未来はおのずと来るものではない。古典がないと新典もできないように、未来を切り開く力は過去の反芻にある。

(おわり)

炭山韓国読書会のブログです。 <https://ameblo.jp/shimogashiwa/>

ツイキャスチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/c:nindaranna>

『アンダーグラウンド』読書感想文

地下鉄サリン事件から 24 年経ったそうだ。

事件があったことは知っているけれど、自分の生活とほとんど関係なく過ごしてきた。

私が心に残ったのは丸ノ内線荻窪行き最初の証言者有馬光男さん(当時 41 歳)だ。自分が事件の渦中にいたにもかかわらず、他人事のように見ていたような気がする。『戦争が終わって何十年のあいだに経済が急成長して、危機感を欠いたまま物資ばかりが大きな意味を持つようになって、人を傷つけてはいけないだとかそういう気持ちがだんだん薄らいできた。そういうことは前からいろんなところで言われてきたわけだけれど、それが実感として迫ってくるようになったんですね』

この事件の被害者と加害者は、互いに顔を知らない者同士だ。そして何の因果関係もないはずの私たちの前にマスコミという媒体を通じて様々な情報が届けられる。何かの事件があるたびにこれが繰り返される。繰り返されるうちに私たちは感覚麻痺に陥る。作者村上春樹はこのような「相互流通性を欠いたモーメント」の行きつく先である「煮詰められパターン化された論理」と「よどみがもたらす無感覚」を危惧した。果たして自分がそこに何も関係ない構成員として存在していると言えるのか？

それぞれが差し迫ったほどではないけれど、何となく感じている不安や危機感。それが地下鉄サリン事件という無差別テロにつながった、ということなのだと思う。

生きてると、予測できないことや自分の力ではどうすることもできない理不尽なことに遭遇することがある。その時の心構えなんて私はまるで出来ていない。災害も、不慮の事故も、受けるのは丸裸の自分だ。けれど、事件に巻き込まれた人つまり当事者は生きてる限り否が応でも自分の身に降りかかった出来事を受け止めざるを得ない。決して明るく前向きに生きていける前途でもない。

それがゆえに、読んでるのがつらく、小春日和の祝日のさなかに、やりきれない気持ちになった。亡くなられた人の遺族や今も重い後遺症が続く人やその家族の方の気持ちを思うと。

その人のふだんの日常のルポルタージュは、それはそれで面白かったので少しはホッとさせられた。

何か自分にできることと言えば、日常を大事にすることなのかなあ。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『 それぞれのアンダーグラウンド 』

オウム真理教の死刑囚たちの死刑執行後に、地下鉄サリン事件の被害者で、現在も重篤な障碍の残る女性の特集をテレビ放映していた。この作品を読んで、明石志津子さんのことだとすぐにわかった。

事件後24年近く経過して、兄の達夫さんの献身を受けつつも、脳の障碍が残り、会話や食事もままならない。テレビクルーに促されたのか、達夫さんが志津子さんの耳元で「オウムの犯人、憎いか？」と尋ね、志津子さんが「に…にくい」と声を絞り出す。

だが、1997年に刊行されたこの作品に、記憶をなくした志津子さんと家族を繋ぐファクターのディズニーランドの記述があり、ディズニーランドへの旅が彼女の出発点だと文章を見つけ、愕然となる。24年後、いまだディズニーランドへの旅が叶えられていないことが明白だったからだ。事件当時、31才だった彼女は50代になっていた。この作品が刊行された当初はあった微かな希望が、虚しく行間を彷徨う。

これほどの未曾有の犯罪なら、被害者は犯人を恨むのは当然だと思えた。だが、インタビューで「犯人には恨みを感じない」という被害者の方々の言葉に首を捻った。当事者ではない人間からみると不思議に思えるが、作者も触れているように、東日本大震災のように「天災」のような不条理さで巻き込まれたからだと感じた。怨恨も因果も関係ない日常の中で。

後で思い出しようもないくらい意識しない一日になるはずだった朝。「バスが二分早く来たから」「牛乳を買う日だったから」とその瞬間まで日常を生きていた被害者の方の淡々とした記述に涙が滲んでくる。どんなに功德を積んでいても、どんな宗教を信じていても、等しくそれはやってきた。

私は、井伏鱒二氏の「黒い雨」を思い出す。原爆投下時の広島を描いたものだが、そこでも一瞬の閃光で何が起こったか把握できない状態で、精一杯生き抜く人々に胸が詰まった。24年前の地下鉄でも、何が起こったかわからなくても、目の前の命の攻防のために、人々は動いた。そして、それぞれの人生も動いていく。

それは、「日常」では起動しないそれぞれの「アンダーグラウンド」なのだと思う。作者は「内なる影の部分」としているが、私は普段は日の当たらない人間の根っこの部分だと感じる。それが、インタビューを受けた方々も気がつかないそれぞれの「アンダーグラウンド」が詰まっているからこそ、この作品に圧倒される。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

『資本主義の危機と末法思想 & メシア思想』

阿弥陀如来の名号を唱えれば、往生できる。無量寿経に説かれている仏教のエッセンスはこれだけだ。なぜ、同じく仏教の流れをくみながら、都心の地下鉄にサリンを撒いて、多くの無辜の人々を殺し、後遺症に苦しませるような思想に、オウム真理教はたどり着いたのか？

『罪と罰』のラスコーリニコフは『一つの殺人は百の善行で償われる』と考えた。『カラマーゾフの兄弟』のイワン・カラマーゾフは自作の『大審問官』において異端審問による殺人を正当化した。『ポア』という、殺すことで魂を救済してやるという麻原彰晃とオウム真理教の幹部たちの出現も、すでにドストエフスキーが、作品の中で予言していたものだ。麻原は現代のスタヴローギンで、オウムの一連の事件は、現代版の『悪霊』だ。

仏教には、末法思想がある。この世はどんどん、悪化しているという考えだ。オウム真理教は、末法思想やメシア思想に依拠しながらも、教団発展の過程で、人類の救われなさを、あえて人類の滅亡を早めることで、逆に救済するという、でたらめな理論でつちあげた。ファシズムの疑似革命理論のようなものだ。それが、地下鉄サリン事件の理論的根拠となった。

50 人もの命を奪った NZ のヘイトクライムも、単独犯であるが、地下鉄サリン事件を起こした人々と同じ末法思想 & メシア思想の存在を感じる。トランプ大統領の誕生の背景となったオルト・ライトだって、資本主義の危機に恐怖する人生の失敗者予備軍に支えられた、ある種のメシア思想だ。日本の右傾化し続ける陰惨な社会状況と、それを放置する政治家の不作為だって、根っこの構造は、変わらない。資本主義の危機に呼応して、末法思想(の亜種としてのヘイトクライム)とメシア思想が出現している。

念仏を無心に唱えるのは、自己欺瞞から自由になるためだ。それ以上でもそれ以下でもない。あとの理屈など、全て屁理屈だ。少なくとも浄土真宗の開祖、親鸞はそう考えた。日蓮もそうだ。(彼らの後継者たちは疑似革命理論に酔っただが。)

(引用はじめ)

やらなくてはならない農作業があるから、私たちはやってこれたようなものです。苗代を作ったら田植えだ、田植えが終わったら今度はりんごの花摘みだ。それに今度は花粉をつけて……なんて休みもなく仕事が続きます。それで気が紛れるから頑張って生きていけるんです。(P.706)

(引用終わり)

長野県の上田市で農業を営む、亡くなった和田さんのお父さんの言葉だ。

「大地は皮膚を持っていて、その皮膚病こそが人間だ」とツアラトウストラは言った。「大地に接吻して、神に謝りなさい」と、ソーニャはいった。

人間が大地に巨大な穴を掘ったから、大地を裏切るような『アンダーグラウンド』が現れた。大地の意義を見失って、足を踏み外した人が、多くの人を道連れにして、その巨大な自己欺瞞の穴に落ちていった。

人が生きていくのに必要な土地だけ耕すことで、大地の意義を知って、無心で生きていければ、それで十分なはずなのに。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343